

俺の名前は青木清。探偵だ。

12月、年末のお笑い番組を見ていると、一本の調査依頼の電話が入った。

「串どんという店を調べてほしい。」



店長の菅原さん エリ子さん

早速、事務所のたろはなを出て午後8時過ぎに店の前に立った。炭火焼の煙が師走の夜空に溶けていく。看板は「炭火やきとり串どん」とある。間違いなし、この店だ。ガラス製の引き戸を開け、俺は店に入る。4人掛けのテーブルひとつ、2人掛けのテーブルが2つ。小さな店だ。テレビが1台設置してあり、俺がさっきまで見ていたお笑い番組が流れている。昔ながらの石油ストーブが赤々と燃え、店を暖めている。席に座ると女性店員が注文を取りに来た。俺は迷わず「君をもらおう」と答える。セクシャルハラスメントではない。冗談を言いたかっただけだ。苦笑い気味の彼女（あとで尋ねたのだが、彼女の名前はエリ子というらしい。）にあらためて俺はこう言った。

「ピンビールとバクダンをもらおう。」

皆はきっと思うだろう。「バクダン」とはなんだ？俺も食べてから理解ができた。後ほど語ろう。先にテーブルに置かれたビールをグラスに注ぎ口につける。バクダンとやらを焼いている間は店内にも白い煙が舞い上がる。そしてバクダンがテーブルに置かれた。バクダンはうずらたまごをみたらし団子のように3つ4つ串刺し、その周りをつくねのタネで包み込む。そいつを炭火でじっくり焼き、オリジナルの甘ダレに付ける串料理だ。俺は食らいついた。それは美味だった。しばらくして俺は勘定を済ませ店を出た。すると店外の雨どいに黄色のバンダナが巻かれているのに気付いた。エリ子が俺を送りながら「私が店にいる時はこのバンダナが目印よ。」と言って微笑んだ。俺は夜空を見上げる。冬のはずなのに、暖かな春風が俺の頬を撫でた気がした。

## ■炭火焼 串どん

営業 : 午後4:00~夜12:00

定休日 : 不定休

住所 : 神奈川県川崎市多摩区堰2-2-1

電話 : 044-819-6039

(電話注文によりテイクアウト予約可。夏は外飲み可)